

下商物語 (その五)

修学旅行について

教諭 林 俊行

高校在学中の最大の思い出は「修学旅行」と答える生徒が一番多いのではないだろうか。数多い学校行事の中でもこれだけは別格のようですね。事実、卒業してからの同期会等でも高校時代の思い出話で一番盛り上がるのではないのでしょうか。

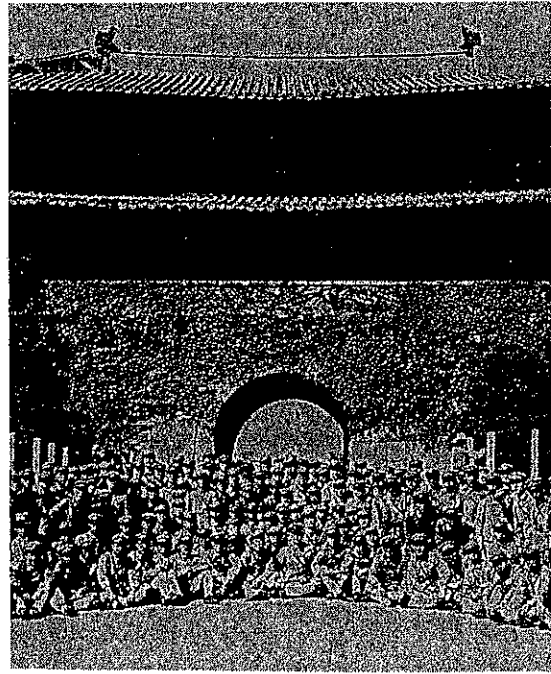
報告会を開催したとの記録もあります。現在も続くこの行事の中でも特筆すべきは、大正十三年の五月から開催された当時の最高学年四年生による鮮満方面への約十日間にわたるもので、当時の生徒の要望で従来の京阪神地方ではいつも行けるからとの理由で代表者が学校側に何回も交渉した結果、昭和十二年までの十四年連続して行われたようです。下関から船で出発し、釜山・京城・仁川・安東・撫順・奉天・平壤・釜山の順に巡り、船で下関までといった強



行日程で当時の治安状況がかなり不安な中で続けられたようです。当時の記録をみても「知識的にも精神的にも培われたものは実に莫大なものがあつた。」と記されています。当時は、本校で支那語(現在の中国語)を教えており、経済的な時代背景からしても生徒が真剣に修学旅行という行事をとらえて実現に至ったものだと考えられます。戦争を機にこの行事も実施できなくなり、終戦後の昭和二十五年から関西地方を皮切りに再開されました。戦後は、関西・九州・関東・信州・沖縄・北海道か

ら現在の東京へと至っています。最近(昭和の終わりから平成にかけて)の修学旅行は、観光で信州方面(乗鞍)にフェリーと新幹線で行向いていましたが、やや行程が大変であつたので、平成になつて初めてのスキーを取り入れた内容に変更されました。このスキー研修は生徒にとつても好評でしたが、信州までの行程が大変だったことと、ある程度予算面での弾力が図られたこともあつて北海道スキー研修へとなりました。当時は、宇部空港からの直行便もあつたので距離はありましたが、飛行機といった交通手段が利用可能となり、ニセコ・キロロといった場所でも専門のインストラクターの指導によるスキー研修が約七年間続きました。その後、予算面や内容での見直しが行われて首都圏での進路学習を絡ませた現在のよ

うなものとなっています。時代と共にこの行事も歩んでいますが、古くは列車(私達の頃はわこうど号といった高校生修学旅行専用列車)で丸一日かかって東京まで往復して、古びた宿泊施設で仲間と寝泊まりした頃から考えると、最近の快適な飛行機や高級



なホテルを利用できることは隔世の感があります。生徒のみならず保護者の方に高校時代の修学旅行での思い出を聞いてみればいかがでしょうか。きっと、いつもと違う表情で青春時代の思い出話を熱く父さん・母さんが語られるのではないのでしょうか。